

# 飯山の森と里の命のにぎわい

信州大学教育学部 准教授 井田秀行

飯山の鍋倉山一帯のブナ林は、最大8メートルもの雪が積もる世界トップクラスの豪雪地帯に属します（写真1）。また、里に小さなブナ林がところどころで見られるのも飯山特有のことです。これらのブナ林では30～40年ほど前まで薪や炭を得るために盛んに利用されていました。



1) 飯山市鍋倉山のブナの森

ブナの木は雪の重みに対するねばり強さにおいて恐らく世界最強です。ブナは、細いとき雪の重みで押さえつけられながら地をはうように育ちますが、折れることも根こそぎ倒れることもほとんどありません（写真2）。ある程度まで太くなると、雪の重みにしなやかに対応しながら幹を立て、その背丈を伸ばし始めます（写真3）。それに対して他の木は、たいてい雪の重みで大きく曲がったり折れたりしてしまいがちです（写真4）。雪の多い場所はふつう木の成長にとっては大変つらい環境ですが雪国飯山では、ブナが雪に強いことが幸いし、豊かなブナの森がかたちづくられたと考えられます（写真5）。



2) 雪の重みに耐え、根元を曲げて育つブナ



3) ブナは太くなると幹を垂直に立ち上げる



4) 雪の重みで折れたスギ



5) ブナが優勢になったのは豪雪のおかげ

雪消え間もない里山を彩るカタクリ（写真6）。その生き様は、可憐な外見とはうらはらに実にしたたかです。早春の約2ヶ月間しか太陽光を必要とせず、他の期間は栄養を蓄えた根の状態で過ごし、それでいて何十年も長生きします。なぜか？ 雑多な植物の生える里山の環境

で大きくならずに一生涯を済ませるには、まわりの植物が大きくなる前に太陽光を独占する必要があるし、翌春に葉をすぐ広げられるよう根に栄養を蓄積する必要があるからです（写真7）。



6) 春の里を彩るカタクリの花



7) カタクリの新しい葉は残雪をも突き抜ける

可憐な花の命は2週間足らず(写真8)。目立つ花は、蜜を求め腹を空かせた昆虫を誘い込むには絶好のネオンサイン。これは短期間に受粉を済ますための巧みな戦略です。その後2～3週間くらいで種子(写真9)を作ると姿を消し、根に蓄えた養分で次の春をじっと待ちます。



8) 花の命は2週間



9) 開花から約1ヶ月で種子をつくる

興味深いのは、カタクリがアリの助けを必要とすることです。アリはカタクリの種子を運びます。とはいえ、アリもしたたかで、タダでそんな気前の良いことはしません。カタクリの種子にはアリの大好きな甘い「おまけ」が付いています(写真10)。巣の近くまで種子を運んだアリは「おまけ」だけをちぎって巣の中に持って入るので種子は無傷。カタクリは種子をばらまいてもらうためにアリに甘い「おまけ」(「エライオソーム」という物質)を用意したのです。もしアリがいなかったら、種子はただ親元の周りに落ちるだけで、そこを離れて分布を広げることはできません。



10) カタクリの種子(ニンジンのヘタのような突起物がアリへの「おまけ」)

里のカタクリは人々の「草刈り」によって支えられてきました。それは、カタクリを刈るのではなく、カタクリが地上から姿を消す頃に生えてくるススキなどを刈ることです。かつてススキなどの草は肥料や屋根の材料のほか農作業用の牛馬の飼料にもなりました。これらを刈らずに放っておくと枯れ草が地面をおおい、翌年それがカタクリの芽吹きや開花を邪魔してしまうのです。カタクリは特に役立つことも邪魔になるわけでもない「ただの草」だからこそ人の暮らしと共にある花といえるでしょう。